

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

狩猟採集から農耕へ：沖縄でのケース

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2009-04-28 キーワード: 作成者: 高宮, 広土 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002002

狩猟採集から農耕へ

沖縄でのケース

高宮 広土

札幌大学文化学部

1 はじめに	ける農耕の起源
2 沖縄諸島における農耕の起源に関する諸説	4 沖縄諸島における農耕の起源に関する要因
3 古代民族植物学からみた沖縄諸島にお	5 結論

1 はじめに

日本列島の最南西端に位置する琉球列島からは、種子島の横峰C遺跡(南種子島教育委員会 2000)や奄美大島の喜志川遺跡(喜志川遺跡調査団 1995)、あるいは沖縄本島の港川遺跡(鈴木 1975)や宮古島のピンザアブ遺跡(沖縄県教育委員会 1985)などの遺跡のように旧石器時代に属する石器や化石人骨が知られている。特に、沖縄諸島においては6ヶ所の更新世後半の遺跡から化石人骨が出土しているが、これらの旧石器時代人が現代沖縄人の祖先なのであろうか。港川人等一連の化石人骨の発見は、これらの人々が、今日の沖縄の人々に結びつくところ最近まで考えられていた。この仮説は今日も主流であるように思える。しかしながら、港川人をはじめとする旧石器人は、更新世末期にかけての急激な陸地の狭小化により、おそらくこの地域から移住したか絶滅してしまった可能性がある(高宮広土 1997a; 1998b; Takamiya 1996; 1997)。この仮説によると、沖縄諸島にヒトの集団が適応できた時期はいつ頃なのであろうか。

沖縄諸島からは、爪形文土器や曾畑式土器が報告されており、少なくとも縄文早・前期にはヒトが存在したことが理解されている。しかしながら、彼らは沖縄という島の環境に適応することができなかったと思われる。おそらく、ヒトの集団がこの地域(すなわち島の環境)に初めて適応できたのは、縄文早・前期ではなく、遺跡数が急増した(すなわち人口が急増した)縄文中期の終わりから縄文後期にかけてであろう(高宮広土 1997a; 1998b; Takamiya 1996; 1997)。この時期を、筆者は『縄文中期』と仮称している(高宮広土 1993)。

では、『縄文後期』の人々は、どのような生業を有していたのであろうか。地中海(Keegan and Diamond 1987; Patton 1996)、カリブ海(Keegan and Diamond 1987)、およびポリネシア(Kirch 1984)の先史時代を参考にすると、大きな島、大陸あるいは大き

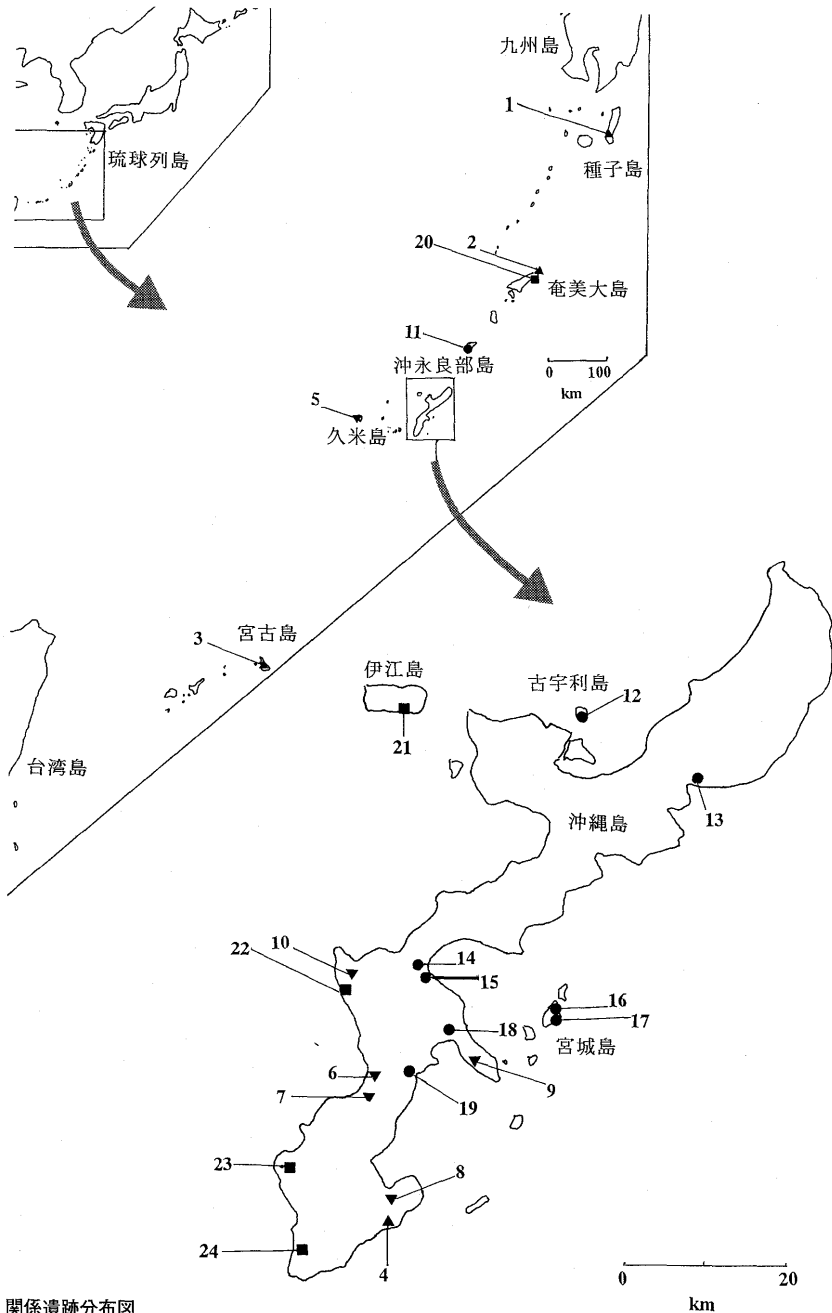


図 関係遺跡分布図

1. 横峰 C 遺跡 2. 喜志川遺跡 3. ピンザアブ遺跡 4. 港川遺跡 5. ヤジャーガマ遺跡
 6. 北谷グスク 7. 森川原遺跡 8. 糸数グスク 9. 勝連グスク 10. 座喜味グスク 11. 神野貝塚
 12. 古宇利原貝塚 13. 前原遺跡 14. 古我地原貝塚 15. 伊波貝塚 16. シヌグ堂遺跡 17. 高嶺遺跡
 18. 苦増原遺跡 19. 萩堂貝塚 20. 用見崎遺跡 21. ナガラバル東貝塚 22. 高知口原貝塚
 23. 那崎原遺跡 24. 真栄里貝塚

▲旧石器時代；●縄文時代；■弥生～平安並行期；▼グスク時代

な島から近距離に位置する島、あるいは海資源、特に大型海獣がコンスタントに入手できる島などであれば狩猟採集で生活することができるが、その他の場合は島で生存するためには農耕が必要だったようである(例えば Cherry 1981)。このような資料をもとに、筆者は沖縄諸島に初めて適応した人々(『縄文後期人』)は狩猟採集民ではなく農耕を持った人達であった可能性もありうることを発表した(高宮広土 1993)。しかしながら、最近の考古植物学的なアプローチによると、縄文後期の人々は農耕民ではなく狩猟採集民だったようである(大松・辻 1999; 高宮広土 1999)。それから数千年後のグスク時代の開始期(12世紀頃)になると、沖縄諸島では農耕が営まれ、階層社会が成立していた。

以上の考古学的資料は、沖縄諸島では、まず狩猟採集の段階があり、グスク時代あるいはそれ以前に農耕が導入されたことを示している。それでは、この地域では、いつ頃農耕が開始されたのであろうか。農耕の起源および拡散は先史学において最も重要なテーマであり、沖縄の考古学研究もこのテーマに関して強い関心を抱いてきた(安里 1992; 国分 1972; 白木原 1992; 高宮広土 1996a; 堂込 2000 等)。その結果、沖縄地域における農耕の起源に関して、今日まで少なくとも6つの仮説が提案されている。それらは、グスク農耕説、弥生農耕説、「海上の道」説、縄文晩期農耕説、および縄文後期農耕説として知られている。これらの諸説のうち、縄文後期農耕説は考古学的アプローチおよび生態学的アプローチという全く異なったアプローチから提案されている。本論では、まず、これらの諸説を簡単に紹介する。次に、沖縄諸島における農耕の始まりの時期について述べる。沖縄諸島では1992年以来フローテーション法が導入され、先史時代における植物利用が以前より理解できるようになってきた。その結果、この地域における農耕の始まりのタイミングがかなり絞られてきた。先史時代の遺跡から回収された植物遺体分析は、上記した6仮説を否定し、沖縄諸島における農耕の開始期に関して新しい視点を投げ掛けている。最後に、この地域で農耕が開始された要因について論ずる。そのために、農耕の開始および拡散に関して最も支持されている2仮説、すなわち、人口圧・フードストレス説および競争饗宴説を沖縄諸島の資料を使って評価する。その結果、両仮説とも沖縄諸島における農耕の起源に関して十分な説明とはならないことが判明した。近年の植物考古学、言語学、および形質人類学的データは沖縄諸島における農耕の起源に関して、新しい仮説を提供するようである。

2 沖縄諸島における農耕の起源に関する諸説

沖縄が政治的にも文化的にも初めて統一された琉球王国時代直前の時代はグスク時代として知られている。グスクとは沖縄の方言で城と言う意味で、沖縄県では少なくとも200以上の城すなわちグスクが確認されている(宮城・高宮 1983)。グスク時代は、この地域における階層社会の成立とそれを可能にした農耕の成立で特徴づけられている。後者

に関しては、多くのグスク遺跡から栽培植物が検出されている。例えば、宜野湾市に所在する森川原（もりかわばる）遺跡からは、9000粒ほどの植物遺体が検出されたが、その内の90%が栽培植物の種子であった（Takamiya 1997）。さらに、北谷町に所在する北谷（ちやたん）グスクからも、24000粒ほどの植物遺体が出土したが、やはりここでも95%以上が栽培植物の種子であった（高宮広土 n.d. 2）。このような状況から、沖縄諸島においては、グスク時代には確実に農耕が存在し、グスク時代になって農耕が始まったとするのが「グスク農耕説」である。実際、1992年以前においては栽培植物はグスク時代の遺跡のみから検出され、それ以前の遺跡からは全く出土していなかった。そのため、多くの概説書などにはグスク時代になって、農耕が本格化したと記されている（宮城・高宮 1983）。

しかしながら、大多数の研究者はグスク時代になって突然農耕が開始されたことについて疑問を持っている。例えば、安里進は、グスク時代以前の10～12世紀を生産経済時代と捉え、この頃に沖縄諸島で農耕が開始されたと考えている（安里 1992）。先史時代における農耕の開始期という点から、ここ15年ほど最も注目を集めている仮説は、高宮廣衛による弥生農耕論であろう（高宮廣衛 1985）。彼は真栄里（まへざと）貝塚より出土した土器や石斧に着目する。前者は本土の弥生系土器を含み、後者は本土弥生文化に属する典型的な石斧、蛤刃石斧、柱状石斧、および抉入石斧であるという。さらに、沖縄諸島では、30ヶ所ほどの遺跡から本土弥生土器が報告されており、奄美以南のみに棲息するゴホウラやイモガイが九州や西日本で検出されたという事実は、弥生時代における本土と沖縄の関係が活発であったことを示唆している。加えて、河口貞徳によると、稲作農耕を含む弥生文化は奄美まで伝播したという（河口 1978）。これらの考古学的資料をもとにして、高宮廣衛は「（奄美と）一衣帯水の距離にある沖縄諸島へ弥生文化の波及も当然ながら予想される」（高宮廣衛 1985: 319）と述べている。

高宮廣衛は、本土の弥生農耕あるいは稲作が北から南へ伝播したと考えたが、それより約30年前には、より南から水田稲作が琉球列島に導入されたという仮説が発表された。柳田国男の「海上の道」説である。柳田は、日本文化の根幹をなす水田稲作は、縄文時代の終わりから弥生時代の初めにかけて、台湾あるいは南中国から琉球列島伝いに北上し、日本本土に伝わったと考えた（柳田 1951）。沖縄諸島の伝統的な稲作は、「踏耕・冬まき稲・ジャバニカマイ」で特徴づけられ、この特徴は日本本土というよりはより南方から導入された可能性が高いことを示唆している（渡部 1993a）。さらに、渡部忠世や佐藤洋一郎は、柳田が想定した稲作と異なる稲作が「海上の道」の時期以前に、琉球列島を伝わって、日本本土に導入されたのではないかという大変刺激的な仮説を提唱した（渡部 1993b; 佐藤 1992）。すなわち、焼畑農耕で栽培される熱帯ジャポニカが縄文時代に、より南から琉球列島を通して北上したというのである。この仮説をここでは、「新・海上の道」説と仮称する。

沖縄先史学では、弥生時代以前の農耕の存在に関する仮説も提唱されている。

まず、新田重清らによる縄文晩期農耕論である(新田 1969; 1982)。沖縄本島では縄文後期の遺跡は、伊波(いは)貝塚や萩堂(おぎどう)貝塚のように崖下に形成されたが、縄文晩期になるとシヌグ堂遺跡や苦増原(にがましばる)遺跡のように台地上あるいは丘陵上という開けた空間へと遺跡が立地するようになる。さらに、縄文後期に形成された貝塚は皆無となり、動物遺体の検出も前時期と比較すると激減する。例えば、縄文後期の遺跡である古我地原(こがちばる)貝塚からは50000点以上の脊椎動物遺体および120000点以上の軟体動物遺体が報告されているのに対し(沖縄県教育委員会 1987)、縄文晩期で最も多くの動物遺体を出土している遺跡は古宇利原(こうりばる)遺跡で、脊椎動物および軟体動物の数はそれぞれ約12000点および3000点となる(今帰仁村教育委員会 1983)。古宇利原遺跡は縄文晩期の中で最も多くの動物遺体を出土した遺跡で、他の同時期の遺跡からは動物遺体は古宇利原貝塚の半分も出土していない。また、縄文晩期には石斧や石皿などの石器が急増する(安里 1986)。これらの考古学的事実は、この時期には植物食が重要であったことを示唆し、この植物食には栽培植物が含まれていたと推測するのが縄文晩期農耕論である(新田 1969; 1982)。

伊藤慎二は、琉球列島における農耕の開始期はさらに古く、縄文後期にまで遡るのではないかという仮説を提唱した(伊藤 1993)。彼は沖縄縄文後期における遺跡の立地と本土の主な同時期の遺跡の立地を比較し、前者がより高い標高に形成されていることに着目した。さらに、同時期においてオキナワヤマタニシが多く出土することについて、人為的な環境破壊があったのではないかと推測した。これらの情報を踏まえ、伊藤は縄文後期に焼畑農耕が存在したのではないかと結論に至った。筆者は「はじめに」にも記したように、沖縄諸島と他地域の島々を比較した結果、沖縄という島の環境では狩猟採集で生存することは容易ではなく、おそらく、ヒトの集団が沖縄に初めて適応した時期に、彼らは農耕という生業戦略を有していたのではないかと推測した(高宮広土 1993)。筆者は、その適応の時期を縄文後期とみなしているのである(高宮広土 1997a; 1998b; Takamiya 1996; 1997)。

このように、沖縄先史時代においては縄文後期からグスク時代まで、各時代に農耕が開始されていたという仮説が提唱されている。では、この地域では実際にいつ頃農耕が始まったのであろうか。次に、古代民族植物学的アプローチからこのテーマを検討してみよう。

3 古代民族植物学からみた沖縄諸島における農耕の起源

このセクションではいくつかの遺跡から出土した植物遺体を紹介し、沖縄諸島における農耕の起源を探索してみたい。まず、沖縄諸島における農耕の起源に関する諸説の中で、最も新しい時期(グスク時代)および最も古い時期(縄文後期)における出土植物遺体、次にその間の時期の出土植物遺体について紹介しよう。

グスク時代あるいはグスク社会は農耕がその生業の基盤であったことは、万人の認めるところである(嵩元・安里 1993; 安里 1986; 1992; 宮城・高宮 1983)。実際、座喜味(ざきみ)グスク、勝連(かつれん)グスク、糸数(いとかず)グスクおよびヤジャーガマ遺跡等のように、多くのグスク時代の遺跡から炭化米や炭化麦が検出されている。問題はその農耕システムの内容であろう。一般的に北海道を除く本土では水田稲作が農耕システムの要と考えられているが、同様なことがグスク時代の農耕についていえるのであろうか。

グスク時代の植物遺体がシステムティックに回収され、同定された遺跡は宜野湾市に所在する森川原(もりかわばる)遺跡(Takamiya 1997)および北谷町に所在する北谷(ちゃたん)グスク(高宮広土 n.d.2)である。前者からは、約9000粒、後者からは約24000粒の植物遺体が検出された。森川原遺跡の場合は、全出土植物遺体のうち最も多かったのはアワで、約4500粒であった。アワ、キビ、コムギ、およびオオムギの雑穀の占める割合は、約90%であった。イネは約600粒で、6%のみであった。北谷グスクでは、コムギやオオムギのムギ類が最も多く検出され、その数は約12000粒であった。この遺跡から検出された植物遺体でも雑穀の占める割合が95%以上で、イネは3%のみであった。この事実は、グスク時代の農耕は水田稲作ではなく、雑穀を中心とした畑作が主な農耕システムであったと考えられる。

縄文後期において、植物遺体の回収および同定が詳細に行われた遺跡は、宜野座村に所在する前原(めーばる)遺跡である。この遺跡からは20基以上の堅果類貯蔵穴が検出され(宜野座村教育委員会 1999)、大松しのぶ・辻誠一郎が主に貯蔵穴より出土した植物遺体を(大松・辻 1999)、筆者が「水溜まり遺構」と呼ばれる遺構より出土した植物遺体を同定した(高宮広土 1999a)。両者ともに約50種類ほどの植物遺体を確認したが、栽培植物は含まれていなかった。また、高宮広土(1999a)の分析の対象となった水溜まり遺構からは、食糧となる植物遺体はあまり回収されなかったが、大松・辻が分析した貯蔵穴からはオキナワウラジロガシが多く検出され、オキナワウラジロガシが前原遺跡人にとって重要な食糧源であったと解釈されている(大松・辻 1999: 234)。

現在のところ、前原遺跡以外で植物遺体を得られた縄文後期の遺跡は、石川市に所在する古我地原(こがちばる)貝塚(沖縄県教育委員会 1987)および沖永良部島に所在する神野(かみの)貝塚(上村 1984)である。前者からは不明種子が報告されているが、これらは栽培植物ではないようである。後者からは、タブノキが20片以上検出されている。渡辺誠は、タブノキは栄養学的に重要な食糧とはならなかったであろうと述べているが(渡辺 1987)、縄文後期の神野貝塚をはじめ、いくつかの先史時代の遺跡から検出されている。橋口尚武によると、伊豆諸島ではタブノキを食したらしい(橋口尚武氏の2000年の私信による)。

植物遺体を検出した縄文後期の遺跡は少ないが、現時点においてはどうやら縄文後期の生業は狩猟採集であったようである。すなわち、縄文後期とグスク時代の間の時期に農耕

が沖縄諸島に導入されたことになる。

高知口原（たかちくちばる）貝塚は読谷村に所在する弥生～平安並行期前半の遺跡である。この時期の遺跡は砂丘上に立地するが、高知口原貝塚も海岸線から数メートルの砂丘上に立地する。発掘担当者の仲宗根によると、同遺跡から出土した土器類や動物遺体も他の弥生～平安並行期前半の遺跡と一致するとのことである（仲宗根求氏の1996年の私信による）。したがって、高知口原貝塚は、典型的な弥生～平安並行期前半の遺跡ということになる。

同遺跡は琉球列島において初めてフローテーション法を採用した遺跡であったので、約2000リットルの土壌をサンプルとして、植物遺体の回収を実施した。その結果、約2300（粒・片）の植物遺体を得た。それらは全て、野生植物のもので、イタジイ、バナ科、タブノキ、ブドウ属、ナシカズラ、およびナス科の種子であった。最も多かった植物遺体は、堅果皮であった（高宮広土 1998b; Takamiya 1997）。おそらく、弥生～平安並行期前期の生業は狩猟採集であろう。

縄文後期と弥生～平安並行期前半の間の時期である縄文晩期の遺跡からは、植物遺体を回収する目的で調査された遺跡はないが、苦増原遺跡（具志川市教育委員会 1977）や高嶺遺跡（1989）から植物遺体が報告されており、それらはシイ類やタブノキである。以上の植物遺体の資料は、縄文後期から少なくとも弥生～平安並行期前半までは、沖縄諸島にいた人々が狩猟採集民族であった可能性を強く示唆している。

次に、グスク時代直前の時期の植物遺体をみてみよう。

那崎原（なざきばる）遺跡是那覇市に所在する8/9～10世紀の遺跡である。同遺跡は丘陵上に立地し、立地の点からは弥生～平安並行期後半の典型的な遺跡である。また、土器も2000点以上検出されたが、それらはいわゆるくびれ平底の土器で、同時期の典型的な土器である。遺構の点から特筆に値することは、250基以上のクワ跡および2本の溝が確認されたことである（那覇市教育委員会 1996）。クワ跡は断面図ではV字型を呈し、鉄鍬が使用された可能性が高い（島弘氏の1994年の私信による）。2本の溝も農耕との関連でその機能が解釈されている（那覇市教育委員会 1996）。発掘調査担当の島は、那崎原遺跡を「生産遺跡」と結論づけている（那覇市教育委員会 1996）。

同遺跡から出土した植物遺体も、島の結論を支持するものである。少量ではあるが、イネ、コムギ、オオムギ、およびアワが検出された。また、栽培種あるいは野生種かは判断できないが、マメ科の種子も出土した。さらに、前原遺跡や高知口原貝塚で検出された堅果類は全く含まれておらず、那崎原遺跡から得られた栽培植物は水田雑草や畑雑草、あるいは拓けた土地に生息するコミカンソウ、カタバミ、カヤツリグサ科、タデ科等の種子を伴っていた（高宮広土 1996b）。那崎原遺跡より検出された植物遺体および農耕に関連したと解釈された遺構の検出は、少なくとも8/9～10世紀には沖縄諸島で農耕が営まれていたことを示している。つまり、沖縄諸島においては高知口原貝塚の時期および那崎原遺跡

時期の間に農耕が開始されたことになる。

用見崎(ようみさき)遺跡は、奄美大島笠利町に所在する6~8世紀の遺跡である。1997年、筆者は熊本大学考古学研究室による発掘調査に参加させていただいて、同遺跡出土の植物遺体を分析する機会を得た。フローテーションのための土壌サンプル量は多くはなく、そのため検出された植物遺体も少なかったが、同定された植物遺体は堅果類やタブノキ等で(高宮広土 1997b)、那崎原遺跡出土の植物遺体とは異り高知口原貝塚出土の植物遺体を連想させた。

1998年から2001年にかけて、熊本大学考古学研究室は沖縄県伊江村に所在するナガラ原東(ばるひがし)貝塚の発掘調査を実施している。この遺跡も6~8世紀の遺跡である。筆者は、この3年間同貝塚出土の植物遺体を分析してきたが(高宮広土 1998c; 2000a; n. d.1)、初年度には数片のイネが検出された。このイネは琉球列島最古のイネとなるが、那崎原遺跡のように雑草の種子は含まれておらず、農耕に関連する遺構も検出されていない。そのため、初年度の報告では、ナガラ原東貝塚出土のイネは交易によって遺跡内にもたらされたものと解釈した。2年目の調査結果においても、数片のイネが検出されたが、それらはやはり雑草を伴わず、高知口原貝塚や用見崎遺跡から検出されたタブノキや堅果類を伴っており、そのため、初年度の解釈を支持するものとなった。3年目の調査ではイネ数片に加えて、コムギが1粒出土した。しかしながら、ナガラ原東貝塚で農耕が営まれたという資料を得ることはできなかった。ナガラ原東貝塚出土の貝類を分析している黒住耐二も、貝類(マイマイ)からは同貝塚で農耕が営まれたことを支持する情報はないと述べている(黒住 2000)。おそらく、6~8世紀は狩猟採集の段階で、ナガラ原東貝塚のイネは交易によって遺跡内にもたらされたのであろう。

以上、沖縄諸島から検出された植物遺体分析を簡単にまとめてきたが、これらの資料をもとにすると、前説で紹介した沖縄諸島における農耕起源に関する諸説は「新・海上の道」説も含めて全て否定されることになる。現時点では、沖縄諸島においては6~8世紀まで狩猟採集を生業とする人々が生活を営み、8/9~10世紀に農耕が開始されたと考えられる。それでは何故、この時期に沖縄諸島において農耕が始まったのであろうか。

4 沖縄諸島における農耕の起源に関する要因

沖縄諸島における農耕の開始に関する仮説は、2で紹介したように、沖縄諸島における先史時代の考古学的な資料を説明するために提唱された仮説であり、農耕の起源に関する一般理論ではない。したがって、他地域には活用することはできない。以下では、逆に、欧米の先史人類学において最もポピュラーな農耕の起源に関する仮説を、沖縄のデータを用いて検証してみたい。

A. B. ゲバウアーと T. D. プライスによると、農耕の起源の説明を試みた仮説は、少な

くとも30説以上あるという (Gebauer and Price 1992)。その中には、「天才の出現」説なども含まれているが、1970年ごろから今日まで、先史学にも最も影響のあった(ある)仮説は、「人口圧説・フードストレス」説と「競争饗宴」説であろう。前者は、1960年後半頃に L. R. ビンフォードによって提唱され (Binford 1968)、その後、さまざまな研究者から検討を加えられ (Flannery 1973; Bronson 1977; Harris 1977; Cohen 1977; Hassen 1981)、洗練されていった (Earle 1980; Keeley 1988)。この仮説は、人口と食糧資源のバランスに注目し、何らかの理由で人口が増加し、その自然環境から得られる食糧で人口を維持することが難しくなった場合に、狩猟採集民族は農耕を受け入れるという仮説である。

それに対して、後者は、1990年に B. ヘイデンによって提唱された仮説で (Hayden 1990)、それまで農耕の起源に関してキーコンセプトであった人口圧を全く無視した仮説である。この仮説は、農耕の始まりと同時に階層社会あるいは複雑な社会 (complex society) への進化の説明も試みたものである (Hayden 1990; 1992; 1998)。彼は、植物の栽培は平等な狩猟採集民族ではなく、食料が豊富で、人口圧がなく、より複雑な社会を有する狩猟採集民族の中で起こったと考える。このような社会の中では、より高いランクの個人はクワキユートルに見られるような饗宴を主催し、その場で高価なあるいはエキゾチックなものを誇示し、参加者に与える。それによって、彼はランクを維持することができ、さらにはより高いランクを得ることもできるという。そのエキゾチックなアイテムとして、植物が栽培されたというのである (Hayden 1990)。そのため、さらに彼は、最初に栽培された植物は食用として重要な植物ではなく、ステータスを維持・確立するために価値が高い植物であったと説く (Hayden 1990)。

両仮説は、農耕の起源の要因として提唱されたものであるが、同時に農耕の拡散を説明する仮説であるとも考えられている。農耕が拡散した沖縄においては、いずれかの仮説でこの地域における農耕のはじまりを説明できるであろうか。まず、ヘイデンの競争饗宴説 (Hayden 1990) を検証してみよう。

沖縄の環境は食糧が豊富であろうか。ヘイデンのいう「豊富」の定義が定かではないが、彼は北米西海岸のような環境を食糧の豊富な自然環境と想定しているようである。沖縄では海資源は豊富かもしれないが、彼の想定する環境と比較するとそれほど食料が豊富であるとはいえない。農耕が開始された直前の時期に「より複雑な」社会が発生していることが、ヘイデン説の大前提であるが、沖縄地域における6~8世紀にはこのような社会が存在していたという資料は今のところ存在しない。さらに、饗宴が行われたことを考古学的に示すことは難しいと彼自身も述べているが (Hayden 1990)、農耕が始まる直前の時期に饗宴が行われたと解釈される遺物あるいは遺構も今のところ未発見である。彼は、人口圧あるいはフードストレスは農耕の始まりとは無関係と考えているが (Hayden 1990)、沖縄の6~8世紀あるいは弥生~平安並行期後半はおそらく人口の減少した時期のようである (高宮広土 1999b)。しかしながら、沖縄諸島から検出された弥生~平安並行期後半の考古学

的資料は、ハイデンの競争饗宴説を支持するものではない。

人口圧・フードストレスという点からいえば、沖縄先史時代において人口圧・フードストレスがあったとすると、それは弥生～平安並行期前半（本土の弥生相当期）であったと考えられる（高宮広土 2000b）。人類学的には、フードストレスを体験しているヒトの集団はフードストレスを緩和するために、移動する、貯蔵する、多様な動植物を食料の対象とする、より多くの時間やエネルギーを生業に当てる、および交易をすることが知られている（Halstead and O'Shea 1989）。沖縄の弥生～平安並行期前半の環境において、前2手段は緩和策としてそれほど有効ではないと思われるが、弥生～平安並行期前半の沖縄の人々は、後3手段を彼らの生業戦略として取り入れていた。同時期の沖縄の人々は「貝の道」を通して、本土における稲作農耕の存在を知っていたと思われるが、高知口原貝塚から検出された植物遺体は、フードストレスにもかかわらず、彼らが農耕に飛びつかなかったことを示している。

4年ほど前までは、筆者は高知口原貝塚と那崎原遺跡のギャップを以下のように説明した（Takamiya 1997）。すなわち、フードストレスを体験していた沖縄弥生～平安並行期前半の人々は、「貝の道」を通して本土の水田稲作を知っており、それを受け入れた。しかしながら、水田稲作は沖縄諸島の環境に適しておらず、弥生農耕コンプレックスである雑穀の方に重点が置かれ、それらの栽培の実験段階が弥生～平安並行期前半後にあり、それが那崎原遺跡の農耕となり、それが土台となって、グスク時代の農耕（雑穀農耕）となった。

しかしながら、フードストレスを体験している人々に栽培の「実験」をする余裕があるのであろうか（黒住耐二氏の1997年の私信による）。この「実験段階」に関しては、今後の資料によって検証されることであろう。現段階の植物考古学的データは、用見崎遺跡・ナガラ原東貝塚および那崎原遺跡の植物遺体の解釈が正しいとすると、この地域では6～8世紀まで狩猟採集で、8/9～10世紀に「突然」農耕が始まったことになる。農耕の突然の開始されたこと、その時点あるいは直前に人口圧・フードストレスが存在しないことおよびより複雑な社会が発生していなかったことは、沖縄諸島における農耕の起源に関しては新しい仮説が必要となる。

沖縄諸島における農耕の起源に関して、最も可能性のある仮説は1994年に発表されたM. J. ハドソンによる人口置換説（Hudson 1994）ではないであろうか。彼は、沖縄の方言が古代大和語から派生した点に注目し、言語考古学の立場から、沖縄方言が本土とのコンタクトおよび伝播によって成立することはあり得ず、おそらく古代大和語を持った人々が沖縄諸島へ移住してきたためであろうと説いた（Hudson 1994）。彼はまた、言語年代学的アプローチによる資料をもとに、この移住の時期を3～7世紀と想定している（Hudson 1994）。古代大和語と沖縄方言の関係は、外間守善も関心を示し、彼も3～7世紀に九州から新しい人々が移住してきた可能性を述べている（外間 1986）。ただし、外間の場合は、南下してきた人々が、沖縄の人々の遺伝構成に大きな影響を与えたとは考えてはいないよ

うである。

その後、形質人類学から大変興味深い資料が提出されることになる。まず、現代沖縄人の直接の祖先となったと考えられているグスク～近世人骨分析を実施した土肥直美は、彼らが沖縄先史時代人（弥生相当期以前）とはかなり異なる形態的特徴を持っていることを示した。前者は、長頭、大柄（弥生相当期以前と比較して）、および頑丈で特徴づけられ、後者は、短頭、小柄、および華奢で特徴づけられるという。そして、両者の違いは本土における「縄文人と弥生人」の違いほどあるという（土肥 1997）。また、百々、土肥、近藤らは沖縄諸島から先島諸島の近世沖縄人の頭蓋の非計測的な特徴を調査した（Dodo, Doi, and Kondo 1998; 百々 1993）。それまでは、現代沖縄人は、アイヌや縄文人とクラスターをなし、渡来系弥生人やその子孫とは異なるクラスターに属するという解釈が定説となっていたが、彼らの研究の結果、現代沖縄人は縄文・アイヌのクラスターではなく、むしろ渡来系弥生人らのクラスターに属することが判明した（Dodo, Doi, and Kondo 1998; 2000）。

さらに、1997年に計測的なアプローチから現代沖縄人は鎌倉人に近いという結果を得た M. ピエトラシウスキーは、1997～1998年にさらに多くの近世沖縄人の頭蓋骨を計測した。彼の結果（Pietruszewsky 2000）も、縄文とアイヌは同じクラスターに属するが、近世沖縄人は渡来系弥生人、鎌倉人、江戸人等の渡来系弥生人の子孫と同じクラスターに入ることを示した。沖縄先史時代とグスク時代以降の人骨の変化は、食性の変化（狩猟採集から農耕へ）でも説明をすることが可能であるが（土肥直美氏の1996年の私信による）、新しいヒトの集団の移住の可能性もありうるのではないであろうか。

言語考古学的推測のように、この新しいヒトの集団の移住の時期が3～7世紀であったとすると、沖縄諸島で農耕が「突然」開始されたという植物遺体分析からの結果とも整合性があるように思われる。また、「先住民」のいる場所に、新しいヒトの集団が移住してくると競争（competition）が予想される（Keegan and Diamond 1987）。このような競争は先史時代のみならず、和人とアイヌ、ネイティブアメリカンとヨーロッパ人、アボリジニーとヨーロッパ人のように、最近の歴史にも見ることが出来る。

しかしながら、沖縄諸島の場合、この新しく移住してきた人々にとっては、その地にいた「先住民」との競争は大きな問題ではなかった可能性がある。その理由は、上記のように、沖縄の弥生～平安並行期前半はフードストレスの時期で、彼らはフードストレスを解決できなかったようだからである。

実際、弥生～平安並行期前半と同時期後半を比較すると、大多数の遺跡は前半に属し、後半の遺跡は極端に少ない。遺跡数が過去の人口を反映すると仮定すると、この遺跡数の激減は人口学的にいうところのクラッシュを意味するのではないであろうか（Kirch 1984; 高宮広土; 1997a; 1999b; 2000b）。人口が減少していた沖縄諸島に、農耕を伴った人々が移住・適応したとすると、後者の人口は短期間で急激に増加したであろう。また、グスク時代以降の人々が「先住民」と形態的に異なるという事実は、「先住民」の遺伝子があまり現代

沖縄人に伝わらなかったことを意味しているのではないであろうか。

このように、言語考古学、形質人類学、および古代民族植物学から得られた最近の資料は、沖縄諸島における農耕の始まりが新しいヒトの集団によるものであった可能性を強く支持するよう思える。言語考古学および古代民族植物学の資料は、7/8世紀までにこの移住が起こったことを示唆するが、8/9~10世紀の遺跡である那崎原遺跡の農耕システムが、グスクの農耕の基盤となったかどうかについては、今後の資料の蓄積を待って検証すべきであろう。以前は、那崎原遺跡の農耕がグスクの農耕のシステムへと変遷したと考えたが、新しいヒトの集団の移住時期がもう少し新しい（例えば10~12世紀ごろ）可能性もありうるからである。

5 結論

沖縄諸島は、そのサイズ、大陸・大きな島からの距離、および自然資源を考慮すると、狩猟採集民族によって移住がなされ、生活が営まれたという世界的にみて珍しい部類の島々である。さらに、狩猟採集から農耕へと生業が変遷したという事実も、世界の島の先史時代を概観するとまれなケースであろう。このことは、沖縄の先史学の資料が人類学の一大テーマである狩猟採集から農耕への変遷および農耕の起源を追及するための資料となりうることを示唆している。

さらに、沖縄が「島」であることは「島は自然の実験室」ともいわれるように（例えば Fitzhugh and Hunt 1997）、このテーマを理解するためには理想的な空間である。それゆえ、沖縄諸島における農耕の起源の探究は沖縄のみならず、他地域における狩猟採集から農耕への変遷を理解するためにも大変意義深いものであると考えられる。そのため、本論ではまず、沖縄のレベルでこの地域における農耕の起源に関する諸説を紹介し、次に、直接的なデータ（植物遺体分析結果）をもとに、沖縄諸島における農耕の開始期を検証し、最後に、如何なる要因により狩猟採集から農耕へと変遷したのかについて論じた。

沖縄諸島における農耕の起源は、やはり沖縄考古学の中でも最も重要なテーマであり、多くの研究者が関心を抱いている。植物遺体がシステムティックに回収され分析されはじめた1992年においては、沖縄考古学会では農耕の開始期についての一致した意見はなく、少なくとも6仮説が提唱されていた。1992年以降、このテーマを理解することを目的として、フローテーション法により植物遺体が回収されはじめた。現在のところ、縄文晩期を除く他の時期の遺跡から植物遺体が回収・同定されているが、沖縄諸島から検出された植物遺体は上記した6仮説を全て否定する結果となった。すなわち、沖縄諸島では、縄文後期から6~8世紀まで狩猟採集で、8/9~10世紀に農耕が開始されたようである。

この植物考古学的データおよび遺跡の年代が正確であれば、沖縄諸島では「突然」狩猟採集から農耕への変遷が起こったということになる。では、なぜこの時期に農耕が開始さ

れたのであろうか。

本論では、沖縄諸島における農耕の起源の要因を理解するために、まず、欧米で最も支持を得た（得ている）人口圧・フードストレス説および競争饗宴説をもとに、6～8世紀と8～10世紀の考古学的データを検証した。その結果、沖縄諸島においては、両仮説ともこの変遷を十分に説明できるものではないようである。ここ数十年の言語学および近年の形質人類学的データは、沖縄諸島における農耕の起源は、農耕を持った新しい人々の移住によることを示唆している。もし、この移住が起こったとすると、「突然」の農耕の開始も十分に説明できるのではないであろうか。

農耕の起源が農耕民による移住という仮説は、「説明」としては刺激的なものではない。しかしながら、沖縄諸島の6～8世紀と8/9～10世紀の状況を踏まえると、現時点において最も妥当な仮説であるように思える。さらに、沖縄諸島では、移住により農耕が開始されたことが事実であったとすると、他地域においても農耕の起源の要因として先史時代における移住の役割を見直す必要があるのではないであろうか。例えば、身近な所では日本列島における水田稲作の拡散も、このシステムが大陸から縄文人へ伝播した結果という意見もあるが（金関 1995）、大陸からやってきた水田稲作民の移住の役割は一体どれほどであったのであろうか。

謝 辞

刺激的な情報を教えて下さった共同研究「東アジアの狩猟採集文化の研究」のメンバーに感謝いたします。また、このような機会を与えて下さった研究代表者、佐々木史郎氏には、この2年間、多方面でも大変お世話になり、心よりお礼を申し上げます。

文 献

安里嗣淳

1986 「沖縄グスク時代の文化と動物」『季刊考古学』11: 68-70。

安里 進

1992 『考古学からみた琉球史』那覇市：ひるぎ社。

Binford, Lewis R.

1968 Post-Pleistocene Adaptations. In Sally R. Binford and Lewis R. Binford (eds.) *New Perspectives in Archaeology*, pp.313-341. Chicago: Aldine.

Bronson, Bennet

1977 The Earliest Farming: Demography as Cause and Consequence. In C. A. Reed (ed.) *Origins of Agriculture*, pp.23-48. Chicago: Morton Publishers.

Cherry, John

- 1981 Pattern and Process in the Earliest Colonization of the Mediterranean Islands. *Proceeding of Prehistoric Society* 47, 175-185.

Cohen, Mark N.

- 1977 *The Food Crisis in Prehistory*. New Haven and London: Yale University Press.

百々幸雄

- 1993 「アイヌと琉球人は」『朝日ワン・テーママガジン14 原日本人（縄文人と弥生人の謎）』14, 73-84。

Dodo, Yukio, Naomi Doi, and Osamu Kondo

- 1998 Ainu and Ryukyuan Cranial Nonmetric Variation: Evidence which Disputes the Ainu-Ryukyu Common Origin Theory. *Anthropological Science* 106(2), 99-120.

- 2000 Flatness of Facial Skeletons of Ryukyuan. *Anthropological Science*, 108(2), 183-198

堂込秀人

- 2000 「奄美諸島の石製土掘具と石製収穫具」高宮廣衛先生古希記念論集刊行会（編）『琉球・東アジアの人と文化』pp.221-237, 浦添市：尚生堂。

土肥直美

- 1997 「沖縄地方人骨の形態的変異性」土肥直美（編）『南西諸島出土人骨の形質人類学的・人類遺伝学的研究 課題番号 07304058』pp.9-10, 平成七年度～平成八年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究報告書。

Earle, T. K.

- 1980 A Model of Subsistence Change. In T. K. Earle and A. L. Christenson (eds.) *Modeling Change in Prehistoric Economics*, pp.1-29. New York: Academic Press.

Fitshugh, Ben and Terry L. Hunt

- 1997 Introduction: Islands as Laboratories: Archaeological Research in Comparative Perspective. *Human Ecology* 25(3), 379-383.

Flannery, Kent V.

- 1973 The Origins of Agriculture. *Annual Review of Anthropology* 2, 271-310.

Gebauer, A. B. and T. D. Price (eds.)

- 1992 *Transition to Agriculture in Prehistory* (Monographs in World Archaeology 4). Madison: Prehistory Press.

宜野座村教育委員会

- 1999 『前原遺跡』宜野座村：宜野座村教育委員会。

具志川市教育委員会

- 1977 『苦増原遺跡』具志川市：具志川市教育委員会。

Halstead, P. and J. O'Shea (eds.)

- 1989 *Bad Year Economics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Harris, David

- 1977 Alternative Pathways Toward Agriculture. In C. A. Reed (ed.) *Origins of Agriculture*, pp.179-243. Chicago: Morton Publishers.

Hassan, Fekri A.

- 1981 *Demographic Archaeology*. New York: Academic Press.
- Hayden, Brian
- 1990 Nimrods, Piscators, Pluckers, and Planters: The Emergence of Food Production. *Journal of Anthropological Archaeology* 9, 31-69.
- 1992 Models of Domestication. In A. B. Gebauer and T. D. Price (eds.) *Transitions to Agriculture in Prehistory* (Monographs in World Archaeology 4), pp.11-19. Madison: Prehistory Press.
- 1998 Practical and Prestige Technologies: The Evolution of Material Systems. *Journal of Archaeological Method and Theory* 5(1), 1-55.
- 外間守善
- 1986 『沖縄の歴史と文化』東京：中公新書。
- Hudson, Mark
- 1994 The Linguistic Prehistory of Japan: Some Archaeological Speculations. *Anthropological Science* 102(3), 231-255.
- 伊藤慎二
- 1993 「琉球縄文文化の枠組」『南島考古』13: 19-34。
- 上村俊雄 (編)
- 1984 『南西諸島の先史時代における考古学的基礎研究』鹿児島市：鹿児島大学法文学部考古学研究室。
- 金関恕 (編)
- 1995 『弥生文化の成立』東京：角川書店。
- 河口貞徳
- 1978 「サウチ遺跡」『鹿児島考古』12: 1-159。
- Keegan, W. F. and J. Diamond
- 1987 Colonization of Islands by Humans: a biogeographical perspectives. In Shiffer, M. (ed.) *Advances in Archaeological Method and Theory* 3, pp.49-92. New York: Academic Press.
- Keeley, Lawrence H.
- 1988 Hunter-Gatherer Economic Complexity and “Population pressure”: A Cross Cultural Analysis. *Journal of Anthropological Archaeology* 7, 373-411.
- Kirch, P. V.
- 1984 *The Evolution of the Polynesian Chieftdoms*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 喜子川遺跡調査団
- 1995 「喜子川遺跡 第3次・第4次発掘調査報告」『青山史学』14, 1-80。
- 国分直一
- 1972 『南島先史時代の研究』東京：慶友社。
- 黒住耐二
- 2000 「1999年のナガラ原東貝塚調査の食用貝類依存体 (予報)」熊本大学文学部考古学研究室 (編) 『考古学研究室報告第35集』 pp.45-54, 熊本市：熊本大学文学部考古学研究室。
- 南種子島町教育委員会

- 2000 『横峰C遺跡』南種子島町：南種子島町教育委員会。
宮城栄昌・高宮廣衛（編）
- 1983 『沖縄歴史地図 考古編』東京：柏書房。
- 那覇市教育委員会
- 1996 『那崎原遺跡発掘調査報告書』那覇市：那覇市教育委員会。
- 今帰仁村教育委員会
- 1983 『古宇利原遺跡発掘調査報告書』今帰仁村：今帰仁村教育委員会。
- 新田重清
- 1969 「最近の沖縄における考古学会の動向」『琉大史学』創刊号，61-70。
- 1982 「海や山に食物を求めて—貝塚から発掘される食料残滓」『新沖縄文学』52，28-39。
- 沖縄県教育委員会
- 1985 『ピンザアブ』那覇市：沖縄県教育委員会。
- 1987 『古我地原貝塚』那覇市：沖縄県教育委員会。
- 1989 『宮城島遺跡分布調査報告』那覇市：沖縄県教育委員会。
- 大松しのぶ・辻誠一郎
- 1999 「前原遺跡から産出した大型植物遺体群」宜野座村教育委員会（編）『前原遺跡』pp.223-241，宜野座村：宜野座村教育委員会。
- Patton, Mark
- 1996 *Islands in Time*. London: Routledge.
- Pietrusewsky, Michael
- 1997 The People of Ban Chang: An Early Bronze-age Site in Northeast Thailand. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association* 16, 119-148.
- 1999 A Multivariate Craniometric Study of the Inhabitants of the Ryukyu Islands and Comparisons with Cranial Series from Japan, Asia, and the Pacific. *Anthropological Science* 107(4), 225-281.
- 佐藤洋一郎
- 1992 『稲のきた道』東京：裳華房。
- 白木原和美
- 1992 「琉球弧の考古学—奄美と沖縄を中心に」網野善彦等（編）『琉球弧の世界』pp.88-129，東京：小学館。
- 鈴木尚
- 1975 「沖縄における洪積世人類の発見」『人類学雑誌』83(2)，113-124。
- 高宮廣衛
- 1985 「沖縄編年のいわゆる後期遺跡について—弥生文化との関連において」『日本史の黎明』東京：六興出版刊。
- 高宮広士
- 1993 「先史時代の沖縄本島におけるヒトの適応過程」『古文化談叢』30（下），1089-1107。
- 1996a 「沖縄諸島における農耕の起源—沖縄本島を中心に」山折哲雄（編）『日本文化の深層と沖縄』（国際日本文化センター叢書12）pp.117-132，京都：国際日本文化センター。
- 1996b 「古代民族植物学からみた那崎原遺跡の生業」那覇市教育委員会（編）『那崎原遺跡発

- 掘調査報告書』pp.83-100, 那覇市：那覇市教育委員会。
- 1997a 「ヒトはいつごろ沖縄諸島に適応したか」『南島考古』16, 27-46。
- 1997b 「用見崎遺跡(奄美大島大島郡笠利町)におけるフローテーション法の導入とその成果について」熊本大学文学部考古学研究室(編)『考古学研究室報告第33集』pp.46-48, 熊本市：熊本大学文学部考古学研究室。
- 1998a 「現代沖縄人の起源」『比較文化論叢(札幌大学文化学部紀要)』1, 55-79。
- 1998b 「植物遺体からみた柳田国男『海上の道』説」『民族学研究』63(3), 283-301。
- 1998c 「ナガラ原東貝塚出土の植物遺体(1998年度)」熊本大学文学部考古学研究室(編)『考古学研究室報告第34集』pp.49-53, 熊本市：熊本大学文学部考古学研究室。
- 1999a 「栽培植物の探索」宜野座村教育委員会(編)『前原遺跡』pp.259-275, 宜野座村：宜野座村教育委員会。
- 1999b 「ヒトの行動からみた沖縄の先史時代」安田喜憲(編)『はじめて出会う日本考古学』東京：有斐閣, pp.239-268。
- 2000a 「ナガラ原東貝塚出土の植物遺体(1999年度)」熊本大学文学部考古学研究室(編)『考古学研究室報告第35集』pp.55-64, 熊本市：熊本大学文学部考古学研究室。
- 2000b 「ヒトの適応過程からみた沖縄の先史時代と編年」高宮廣衛先生古希記念論集刊行会(編)『琉球・東アジアの人と文化』pp.403-426, 浦添市：尚生堂。
- n.d.1 「ナガラ原東貝塚出土の植物遺体(2000年度)」熊本大学文学部考古学研究室(編)『考古学研究室報告第36集』熊本市：熊本大学文学部考古学研究室(印刷中)。
- n.d.2 「北谷グスク出土の炭化種子(仮題)」北谷町教育委員会(編)『北谷グスク発掘調査報告書』北谷町：北谷町教育委員会(印刷予定)。
- Takamiya, Hiroto
- 1996 Initial Colonization, and Subsistence Adaptation Processes in the Late Prehistory of the Island of Okinawa. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association: Chang Mai Papers* 2, 143-150.
- 1997 Subsistence Adaptation Processes in the Prehistory of Okinawa (Ph.D. dissertation), Los Angeles: UCLA.
- 髙元政秀・安里嗣淳
- 1993 『日本の古代遺跡47沖縄』東京：保育社。
- 渡部忠世
- 1993a 「稲作の南西諸島への北上」渡部忠世(編)『稲の大地』pp.210-222, 東京：小学館。
- 1993b 「日本への受容と展開—海を渡った稲」渡部忠世(編)『稲の大地』pp.147-180, 東京：小学館。
- 渡辺誠
- 1989 「宮城島高嶺遺跡出土の植物遺体」沖縄県教育委員会(編)『宮城島遺跡分布調査報告』pp.217-218, 那覇市：沖縄県教育委員会。
- 柳田国男
- 1951 [1993] 『海上の道』東京：岩波書店。